

第 55 回 纏向遺跡 その1

奈良県桜井市の纏向遺跡で、3世紀前半と推定される同じ方位を向き、同一線上にある三つの建物跡や周囲の40メートル柵列遺構が確認された。このことは市の教育委員会が平成21年3月20日に発表、翌21日の全国紙各朝刊で報道された。この遺構は3世紀前半とされたが、纏向遺跡の誕生を2世紀末から3世紀初とする説の根拠は、纏向遺跡の出現とほぼ同時に造られた初期の前方後円墳（纏向型）勝山古墳の周溝から出土の木製品を測定した結果である。即ち、その出土品を年輪年代法によって測定した結果、3世紀初頭に伐採された木材であることが判明した。年輪年代法とは、樹木の生長が年毎の気候の変動に左右され、年輪として記録されていくことを利用して、遺跡の絶対年数を割り出そうとする試みである。杉なら杉、ヒノキならヒノキの暦年のパターン調べ上げ、発掘された木材の年輪と照らし合わせれば、その木材が伐採された絶対年数を知ることが出来るという方法で、日本の場合、弥生時代は勿論、縄文時代のある時期までなら確実に年代を特定できるという画期的なものである。

この測定によって、勝山古墳の周溝からでた木材は3世紀初頭のものとなつた。だから、この古墳は3世紀初頭に築造された、即ち、卑弥呼の時期と重なりと邪馬台国畿内論者は主張した。それに対する異論は、勝山古墳で見つかった木材は、3世紀始めに伐採されていたとしても、伐採後すぐ周溝に埋もれたのかどうか確認できない。例えばその木材が建物の部材として利用された後捨てられたとしたら、古墳築造年代はいろいろな可能性が考えられる。結論として、勝山古墳が3世紀初頭以降に造られたとはいっても、3世紀初頭とは断定できないということであった。最近の発掘成果によって、多くの木材のサンプルが得られており、年輪年代法のデータの例数が豊富になれば、異論なく纏向遺跡誕生の年代が決まるのではないかと期待される。

三輪山麓の扇状地に造られた古代最大規模の集落跡である纏向遺跡は、それまで何もなかった場所に計画的に造営され、忽然と姿を現した政治と宗教の古代都市であった。遺跡の大きさは東西2キロ、南北1.5キロで、藤原京や平城京の都城と遜色ない広さである。そこに幅5メートル、深さ1、2メートルの大きな溝がV字状に2本掘られ、纏向遺跡を東西に流れる4本の川を結ぶ全長2、600メートルに及ぶ大運河となっていた。

纏向遺跡は3世紀後半に規模が倍近く拡大したという説が有力である。その前半の土器が「庄内式土器」で、後半の土器が「布留式土器」と呼ばれている。この二つの土器の名は、古代史における「時間軸」として使われているので記憶しておくとうまい。纏向遺跡で出る土器は在地系だけでなく、外から持ち込まれた（外来系）土器が多いのが、それまでの弥生の環濠集落と異なっている点である。外来系の中では東海（49%）、山陰・北陸（17%）、河内（10%）、吉備（7%）、関東（5%）、近江（5%）、西部瀬戸内（3%）、播磨（3%）、紀伊（1%）であった。最も多い東海（尾張）産やその他の地の土器は生活土器である。それに反し、数は少なくとも吉備産の土器は狐帯紋と呼ばれる直線と曲線を組み合わせた哲学的な文様を付けた祭祀用呪具であることから、この土器の役割が重要視されている。

纏向で生まれた前方後円墳も外来系である。前方後円墳の原型はまず吉備で誕生し（倉敷市の弥生後期の楯築墳丘墓・円墳の両脇に2つの方形の出っ張りを持つ）、これに出雲の四隅突出型墳丘墓の貼石やヤマトの埋葬文化が習合して、纏向型前方後円墳（まだ完全には型が定まっていない・庄内式土器時代）が誕生し、その後北部九州の豪華な副葬品という文化が加わって、後のヤマト朝廷を象徴する定型化した前方後円墳（箸墓古墳など、布留式土器時代）となるのである。

纏向は古代の交通の要衝で会った為、「外」から土器や文化が集まってきたと推定されている。東から西に傾斜している奈良盆地の西側は湖沼や湿地帯で、幹線道路は東と南側を走っていて、その交点が纏向あたりであった。近くに古代の市場・海石榴市がありそこは東国への入口であった。さらに、大和川の水運は瀬戸内海に通じ、西日本と結んでいた。飛鳥時代の土器に「大市」と墨書きしたであろう破片が出土している。箸墓古墳周辺は「和名類聚抄」（わみょうるいじゅうしょう）によれば「大市郷」に比定される地域であり、大きな市があったと云う伝承が続いていたと考えられる。

纏向遺跡には一般人が生活する竪穴式住居が見当たらず、そして農耕器具の出土が少なく土木具が多い、一方祭祀遺物やこれに伴う導水施設が発見されている。また、鉄滓や鉄鍛冶の道具が見つかっていて、盛んな鉄器生産が始まっていたことが判っている。これらの特徴は、①第一次産業従事者の欠落、②共同体内分業の進展、③濃厚な政治的祭祀的要素とまとめることが出来る。というわけで、個々の部族を超える国・都市の萌芽が認められるのである。すなわち纏向遺跡には3世紀から4世紀にかけてのヤマト朝廷があり、倭国の中心であったと思われる。

弥生時代を通じてもっとも繁栄した地域は北部九州であった。朝鮮半島に近いという地の利を生かし、海峡の両側に勢力を伸ばして、最先端の文物の流入を招き入れ、他の地域を圧倒していた。中国の文書によれば、朝鮮半島南部には鉄鉱石の鉱脈があって、周辺の人が群がっていて、その中に倭人も含まれていたという。この時代には鉄は北部九州の寡占状態にあった。纏向前夜の西日本各地の「鉄器の保有量」は、北部九州が断然1位、次が熊本付近、そして山陰地方や吉備の一带が続いていた。意外なことにヤマトには鉄はあまり流れ込んでいなかったし、むしろ鉄欠乏症の状態にあった。鉄の保有の差は、一般に武力の差と考えられがちだが、それよりも大切なことは、鉄器の普及によって農業生産の効率が上がり、地域が豊かになることである。

この状況について、出雲が絡んだ仮説が提出されている。その説は弥生時代後期初頭まで安定していた西日本の鉄の流通は、後期中葉頃からきな臭くなってくるとした。すなわちヤマトの繁栄を阻止しようとした北部九州が関門海峡を封鎖して、畿内に向かう鉄素材流通を制限したからだという。北部九州は、日本海側を通じたヤマトへの鉄の流通を阻止すべく、山陰地方と結託した。ヤマトに鉄を流さないことを条件に鉄を意図的に山陰地方に流した。実際にヤマトが鉄に困窮していたころ、山陰地方には鉄器が溢れ出していたという。同様に瀬戸内海の制海権を得る為の鍵を握っていた吉備にも鉄を供給し、だからこそ吉備も発展した。

では、なぜ3世紀に突然纏向が勃興したのであるのか？深刻な鉄欠乏症であったヤマトが、それにもかかわらず、纏向に新古代都市を建設し、一気に西日本を統一するほどの力を持つに到ったか？もちろんこれは、単一の強大な王権によって出来たものではなく、周囲の首長層が寄り集まった「総意」によって誕生したわけである。それにしても、なぜ人びとを集める求心力が、突然ヤマトに備わったのであるのか？これにはやはり鉄が絡んでいる。ヤマトは宇治川を遡り、琵琶湖経由で但馬・丹波から鉄の供給を受ける経路を開いたのではないのか？金属冶金の技術をもたらしとされる「天日槍・アメノヒボコ」は、ヤマト建国の直前に新羅から渡来し、最終的に但馬の出石に留まったという。ひょっとしてアメノヒボコは、このあたりに製鉄の拠点を造り、密かにヤマトに鉄を送りこんだのではなかろうか？

この事実が世間に知られることになった時点で、西日本各地の首長層は青ざめたはずである。ひとたびヤマトに鉄が流れ込み、この地が発展してしまえば、それを潰すことは容易ではなく、ヤマトの後背地の潜在力を考えれば、自分のほうが危くなる。それならばと、われ先にヤマトにはせまじることにしたのではなかろうか？ある時を境に、ヤマトに各地の首長が集まり出し、建設発展が始まる。纏向では吉備、山陰などの土器が増えて行き、最後にやや乗り遅れる形で北部九州がやってくる。そして、首長の合意による王の推戴、ヤマト朝廷へと通じていったのではないのか？

纏向遺跡を見守る霊山、三輪山に祭られる神は出雲神・大物主神である。「日本書紀」によれば大物主神は「ヤマトの三輪に住みたい」といってヤマトに降臨し、第10代崇神天皇などは、「ヤマトを造成した神」と称えている。神代の出雲国譲りの前に、大物主神はヤマトに一番乗りをしていた。しかし、いったんヤマトが建国されると、新体制の象徴である前方後円墳を拒否し、山陰地方は没落し埋没してしてしまうのである。このことは出雲神話に似ているし、また朝廷が出雲の神宝を検校し、出雲をいじめたという「書紀」の記事にも対応している。

その次にヤマトに現れたのは物部氏の祖の饒速日命で、天の磐船で降臨し、国見を行って「日本」と名付け、一つの国を建てたのではないかと思われる。その出身地は明記されていないが、纏向遺跡との関わりからは吉備ではないかと推定されている。考古学は前方後円墳の原型がまず吉備で造られていること、吉備の土器は「祭器」であり、他の地域とは異なっていることを示している。一方、物部氏も、他の豪族とは違う特別な性格をもっており、吉備のそれとよく似ている。纏向には多くの地域が集まっていたが、核となる勢力は吉備であったと考えられる。吉備は祭祀のための土器をヤマトに持ち込み、ヤマトの宗教観に多大な影響を及ぼしていた。朝廷の祭祀形態を物部氏が確立し、天皇家は現在にいたるまで、その祭祀形態から多くの伝統を引き継いでいるという。そして不思議なことは「日本書紀」が吉備を無視していることで、「ヤマト建国に参加していたのかどうか、わからない」とでもいいたいのか、その文面に吉備を全く登場させていないという奇妙なことがある。

「日本書紀」の時間設定は第1代神武天皇と第10代崇神天皇の間に欠史8代の天皇があり、経時的な記述は信憑性がない。神武と崇神は二人とも「ハツクニシラス」天皇という名をもっていて、同一人の可能性が強い。即位までの事跡が神武として、即位後が崇神として書紀にかかれているのではないかというのである。その実在した初代王と考えられている崇神天皇の宮は磯城瑞籬宮(桜井市金屋)であり、第11代垂仁天皇の宮は纏向珠城宮(桜井市穴師)、第12代景行天皇は纏向日代宮(桜井市穴師)で、3代続けて三輪山の西麓にあり、ようするに纏向遺跡の周辺に位置している。

(岡野 実)